

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年3月31日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22560597

研究課題名（和文） 近代の城址における文化的景観の保全、創出、破壊の思想

研究課題名（英文） Thought of preservation, creation and destruction of cultural landscape at modern ruins of castle

研究代表者

野中 勝利 (NONAKA KATSUTOSHI)

筑波大学・芸術系・教授

研究者番号：40302400

研究成果の概要（和文）：地方の城下町都市の近代化過程における城址の文化的景観の意味を、明らかにした。城址の近代化においては、土地利用の側面と模擬天守閣の側面から捉えた。甲府城址では、や間梨県が城址に公共施設を整備したり濠を埋め立てたりして、公園化は城址の保存よりも公共事業用地化を目的としていた。それに対し甲府市民や甲府市会は城址の保存を主張していた。一方、城址に建設された模擬天守閣は木造で、配置計画や外観意匠にこだわりがあった。地域住民にとって、身体性を帯びた求心性が働くとともに、文化的共有財としての象徴性があった。いずれも近代の造営による新たな壮観が地域に受け入れられた。

研究成果の概要（英文）：This research aims at explaining the meaning of the cultural landscape of castle ruins in the modernization of local castle towns. Subsequent moves by Yamanashi Prefecture to build public facilities, fill in the moat, and turn the site into a park were intended more to make the land suitable for public works than to preserve the castle ruins. The reconstructed castle towers built on their ruins were constructed of wood, and great care was given to the design of their layout and their external appearance. The impressive spectacle presented by the reconstructions built using modern construction techniques were accepted by the local communities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：環境デザイン

科研費の分科・細目：建築学、都市計画・建築計画

キーワード：城址、文化的景観、天守閣、公園、近代化

## 1. 研究開始当初の背景

わが国の都市の多くは近世城下町を基盤として形成された、いわゆる城下町都市である。近時、大洲などの木造天守閣の復元、彦根の濠の浄水化小田原での濠の復元など、城下町都市では城址への投資がされている。これは地域の個性を最も象徴的に表す拠点の歴史的環境再現の取り組みである。

る。

他方、新たな主体的創出ではなく、城址の既存の環境を活かす制度の動きがある。具体的には天守や石垣などの高さを基点とした高さ規制による眺望景観を確保する仕組みである。これらは城址の市街地の環境を高さから整え、城址のもつ現状風致を維持しようとする取り組みである。

こうした城址を中心とした城下町都市の都市づくりの取り組みは、近世城下町を基盤とする中心市街地（旧市街地）を中心としたコンパクトシティへの志向にも合致する。中心市街地の再編と投資によって城址を正当に評価することが求められそのためには時系列的な文脈の位置づけを明確にする必要がある。このように城址の持つ求心性や再価値化を通じた、都市づくりの計画方法論の再構築が極めて時機を得た研究課題といえる。

## 2. 研究の目的

本研究は、わが国固有の都市基盤である近世城下町を起源とする城下町都市の明治以降の都市づくりを文脈的に解釈し、その延長上で計画論へと応用する方法論を確立しようとする構想である。

その中で本研究は、近世城下町の依拠する拠点である「城」に着目し、明治以降の「城址」を取り巻く動きを多面的かつ相対的に捉え、同時代的な城址の文化的景観の意味づけを行うことを目的とする。

## 3. 研究の方法

地方の城下町都市の近代化過程における城址の文化的景観の意味を、当時の都市社会や市民生活との関係を分析することで、文脈的に明らかにする。

城址の近代化においては、二つの側面から捉える。一つは城址の公園化と濠の埋め立てからみた土地利用の側面であり、もう一つは模擬天守閣などの城郭建築からみた都市施設の側面である。これら二つの側面から、当時の都市社会における城址の文化的景観の位置づけや意味、そして市民生活における城址の受け止め方から、文化的景観の思想を考察する。

これまでに研究対象とした全国の五十余の城下町都市を対象に、研究課題に応じた適切な事例を抽出する。確定された分析対象都市において、分析する史資料を、現地調査等で発掘・収集する。公文書・記録、議会議事録や、当時発行された文献、特に市民生活との接点として地元で発行された新聞の記事を活用する。

## 4. 研究成果

### (1) 城址の公園化と濠の埋め立て

1873年の政府による城郭の存廃によって城郭は「存城」と「廃城」に分けられた。「存城」の城址は陸軍省の所管になったが、すべての「存城」を軍用地として利用したわけではなかった。政府は、現に軍用地として利用していた城址を除いて払い下げることとした。1890年に不用城郭の払い下げを、陸軍省の請議によって閣議決定した。ここでは国防上不用に属する城郭を、旧藩主が払い受けを志願するか、あるいは散在地のうち官庁が払い受けを企望する時は、相当の代価で払い渡すことが示された。

多くの都市では実際に旧藩主が払い下げを受けた。しかし払い下げの対象となる適当な旧藩主が

いない場合があった。幕府直轄地の甲府などである。

そこで、甲府城址を対象として払い下げと公園化に至る背景や経緯、公園としての実態を分析した。

山梨県は、明治初年から城址の借り受けや払い下げを政府に申し出ている。主旨として城址の保存が謳われていたが、実質的には公共施設整備などの用地確保が目的であった。

そして鉄道の開通を契機として府県連合共進会の会場として城址を利用するとともに、「公園」として借用することに成功した。その後も払い下げの交渉を継続していたが、予算を確保できないため、価格で折り合いがつかなかった。結局、甲府市内の篤志家の寄付に頼り、ようやく払い下げを受けることができた。

山梨県は城址を公園にしたが、十分な管理ができる予算を確保しなかった。松の立ち枯れや濠の汚濁などが再三指摘された。昭和に入っても同様だった。

また山梨県は甲府駅の開設に伴う城址の毀損を受け入れ、中学校と県庁舎の新築に際しては、その財源確保のため濠を売却した。さらに石垣を崩して車道の斜路を整備した。このように公園としての緑地整備や、城址としての風致の維持や保存に積極的ではなかった。むしろ濠への新たな架橋や城址での洋風建築など、近代都市としての景観を加えていた。

一方、甲府市は一時、公共施設用地として城址の払い下げを申し出たが、甲府市会は城址の一角に立地した駅の開設や県庁舎の建設に伴う濠の埋め立てに対して城址の保存を主張した。しかし自らが管理することには躊躇した。

近代の城址公園の整備や管理、史跡としての風致保存に積極的な姿勢がなかったのは、幕藩体制下からの風土にも影響されているとみられる。幕府直轄地であった甲府には勤番が赴任し、その勤番も定期的に交替した。他の城下町のような絶対的な藩主という拠り所がなく、近代においても城を媒介とした精神的な求心性が乏しかったことが背景にある。

### (2) 模擬天守閣の建設経緯と意義

#### ① 近世城郭の城址に建設された模擬天守閣

戦前までに近世城郭の城址に模擬天守閣が建設されたのは、大阪、八幡及び上野の三都市である。これまでに大阪についての研究は蓄積があるため八幡及び上野の二事例を対象として分析した。

八幡では八幡町が建設主体となり、町内外から広く寄付を仰ぎ、また物納もあった。この寄付金を集めるという手法は大阪の模擬天守閣の建設と同様である。一方、上野では、政治家個人の私財で建設された。地域住民からの寄付金の申し出もあったが、受け入れなかった。

建設にあたっては、いずれも多く地域住民の労力の提供を受けた。特に不況時でもあり、雇用の場として、また木造建築としての技術の実践の

場として役立った。鉄筋コンクリート造だった大阪の模擬天守閣とは対照的である。資金調達では八幡と上野は対照的だったが、いずれも地域住民の多くが建設プロセスに参加することで、地域で築き上げた施設であるという、身体性を帯びた求心性が働いた。そして歴史的資源である城址という史跡での建設であることから、地域の人々には文化的共有財としての象徴性があった。

いずれの模擬天守閣とも、その建設にあわせて城址の整備も行われた。石垣や天守台などの土木構造物のみが残る城址に、模擬天守閣のほか、土塀や植栽などの「公園」としての整備がされた。

また八幡と上野は、藩政期に天守がなかった城である。したがって模擬天守閣は復元ではなく、また史実への関心は乏しかった。視対象としての外観意匠にはこだわりがあり、眺められる対象としてのまったく新たな近代の景観が創出された。こうあって欲しかったという「あるべきすがた」への志向ではなく、近代の装いであった。このつくりあげられた城址の近代的景観は積極的に地域に受け入れられた。

これらの模擬天守閣には展示品や陳列品があり多くの人々を内部へと受け入れた。歴史的な史料や陳列品などがあり、訪れた人々にはその都市の歴史的な独自性に対する視覚的な経験を得ることになる。藩政期の城郭建築は、一般の人々としては、仰ぎ見る対象だった。城址におけるそれに代わる近代施設としての模擬天守閣の中に入り、そしてそこで地域の歴史文化に間近に接するという近代的経験の場でもあった。

このように近世城郭の城址に建設された模擬天守閣では、地域の人々の身体性を帯びた求心性が働き、また文化的共有財として象徴性があった。戦国的城郭の城址に建設された模擬天守閣が必ずしも精神的な求心性がなかったことは対照的である。岐阜の例を除けば、大阪の模擬天守閣の計画発表後のほぼ同時期に建設され、いずれもその経緯において大阪の影響を受けている。しかしこうした違いが生じたのは、戦国期城郭が山城であるという立地場所や敷地規模による制約もあるがむしろ廃城からの期間、換言すれば城址としての期間に起因しているとみられる。戦国期からは三百年余りを経ているが、明治維新からは六十年ほどである。こうした年月の差が、地域の人々の城址に対する意識の違いに表れ、模擬天守閣の建設経緯や意義が異なる背景になったと考えられる。

## ② 仮設模擬天守閣の建設経緯と意義

甲府と津山では、それぞれ城址を会場として開催された共進会と博覧会において、仮設の模擬天守閣が建設された。甲府の共進会は1906年に山梨県が主催し、津山の博覧会は1936年に津山市が主催して開催された。

甲府の共進会は、山梨県による城址の払い下げを伴う政府との交渉過程で、その開催が計画された。山梨県会での延期決議を覆してまで、県当局は開催を推進した。すぐには払い下げられなかつ

たが、城址を公園にすることを保証する意味でも共進会の開催は必要であった。

共進会施設として建設された模擬天守閣は、考証による復元でもなく、簡易で小規模な建物だったが、模擬天守閣は見る者に近世の姿を想起させている。

共進会の入場者は洋風建築だった正門とセットでその上背後にある模擬天守閣を見ることになる。城址内でも天守台が一番高所であり、入場者は模擬天守閣を仰ぎ見ながら会場を回遊した。共進会場の視覚的求心性があった。またイルミネーションが正門と模擬天守閣に施され、電飾の夜景という非日常性と祝祭性を担った。

建物内部にはあまり見るべきものはなかった。天守台からの眺めを体験する誘導装置だった。そして共進会開催の象徴的施設であると同時に、城址の存在を主張する装置でもあった。

津山の模擬天守閣は、旧藩主や旧家老などが所有する宝物などを展示した郷土館だった。維新時までにあったかつての天守を考証した復元ではなかったが、同じ五層の木造建築だった。ただし、施設の建築様式や展示物は城址という歴史的経緯の文脈に沿うものだった。

津山での博覧会の開催時期には、各地の模擬天守閣の建設に触発されて、津山でもその建設が望まれていた。仮設でつくられた模擬天守閣であったが、そのまま保存するか、あるいは常設の施設として建て替えるか、という意見が出された。いずれにしても常設の模擬天守閣の希望が、より現実的なものへと市民の世論が醸成していった。

甲府、津山とも、鉄道の開通を契機として共進会、博覧会の施設として仮設の模擬天守閣が建設された。いずれも近世城郭の城址で開催され、模擬天守閣は天守台に立地した。主催者ではない民間事業による施設であり、有料施設だった。会場内では最も高所にあり、また夜間照明により多くの視線を集めた。近代化のイベントというハレの舞台における集客装置であり、近代の祝祭性を帯びた都市施設だった。

一方、甲府と津山では建設の時期は異なる。本研究で対象とした模擬天守閣の建設時期では、甲府が最初期である、津山は最後期である。従って建設時の背景から位置づけは若干異なった。

甲府の場合、まだ城址本丸に模擬天守閣を建設するという経験がない時期だった。仮設の模擬天守閣を保存する、あるいはそれに代わる本格的な建設などへと世論が大きく動くことはなかった。近世に天守がなかったこと、幕府直轄地だったことも一因である。それよりも地域の人々が希望していた城址の開放が実現されてから間がなく、市街から視線を集めて、城址公園を主張するような存在に価値があった。

津山の場合は、各地で建設された模擬天守閣の影響があった。そのため、仮設として建設されたにもかかわらず、また維持管理も充分ではなかったにもかかわらず、取り壊されなかった。仮設が実質的に常設化した存在として市民に親しまれた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 野中勝利、城址に建設された仮設模擬天守閣の建設経緯と意義-戦前の地方都市における模擬天守閣の建設に関する研究その3-、日本建築学会計画系論文集No. 689、査読有り、2013
- ② 野中勝利、近代の甲府城址における公園化の背景と経緯、ランドスケープ研究Vol. 76No. 5 査読有り、2013、pp427-432
- ③ 野中勝利、近世城郭の城址に建設された模擬天守閣の建設経緯と意義-戦前の地方都市における模擬天守閣の建設に関する研究その2-、日本建築学会計画系論文集No. 652、査読有り、2010、pp1471-1479

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

野中 勝利 (NONAKA KATSUTOSHI)

筑波大学・芸術系・教授

研究者番号：40302400